

『壁 ドイツをつらぬく国境』展によせて

著者	杉谷 眞佐子
雑誌名	関西大学年史紀要
巻	21
ページ	53-60
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/8810

『壁——ドイツをつらぬく国境』展によせて

杉谷 眞佐子

一 背景

二〇一一年は、日本とドイツの交流が開始されてから一五〇年の記念の年であった。一八五三年の黒船来航後、一八六〇年、ドイツ、即ち当時のプロイセンは、オイレンブルク伯爵のもと八〇〇人からなる使節団を日本に派遣する。粘り強い交渉の結果、一八六一年一月二十四日、「日本・プロイセン修好通商条約」が締結された。日独両国はこれを記念し、様々な行事を開催している。

同じ二〇一一年、ドイツはもうひとつの節目を迎えている。一九六一年、ベルリンの街を横切る「壁」の建設以来、五〇年が経過したのである。これを機に、『旧東

独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金』が、二〇枚の大型パネルからなる「ベルリンの壁建設五〇周年」の写真展を制作し、「壁——ドイツをつらぬく国境」(以下、『ベルリンの壁』展とも称する)の巡回展が企画された。西日本では多くの関心が寄せられるなか、ドイツ連邦共和国総領事館、文化・広報部が、各地の日独協会、大学、市町村の関連機関等と連絡を取り実施された。

関西大学での「ベルリンの壁」展開催に関しては、大阪日独協会から共催の問い合わせもあり、ドイツやヨーロッパの現代史へ関心が高まり、さらに日本のアジアでの平和共存を考えていく機会になれば、ということから

開催の運びとなった。その背景には、人権問題研究室でドイツやポーランドからの講師を招き、歴史認識をテーマとするシンポジウムを開催するなどを通じて、大阪ドイツ文化センターや日独協会、領事館など諸方面の協力を得てきた経緯もある。

「ベルリンの壁」展を本学で開催するに当たっては、さらに重要な契機があった。文学研究科では藪田貫先生や大島薫先生が中心となり申請した「大学院教育改革支援プログラム」が採択された後、それを受け継ぐ形で「EUー日本学教育研究プログラム」が、学際的な副専攻として開設されている。副専攻には「EUー日本学講義」「日本学フィールドワーク」「KU・EUワークシヨップ」と並び、「EU・日本学ー学術コミュニケーション・トレーニング」の科目がおかれ、筆者はその科目の主担として、大島先生、豊田真穂先生たちとともに指導にあたりている。この授業では定期的に、ドイツのデュッセルドルフ大学の「現代日本学講座」の学生たちとテレビ会議を開催し、お互いの社会や文化について研究発表を行い、議論を重ねている。そのような経験を通じ、ドイツの現

代史に対する考え方を知り、認識や関心を広げることの重要性が議論されていた。

従って「ベルリンの壁」展開催にあたっては「EUー日本学副専攻」の現在の責任者、芝井敬司先生が中心になって大学内での可能性を具体化されたもので、「年史編纂室」の理解と協力が得られたことは幸いであった。会場として年史編纂展示室の廊下が提案されたが、そこは周知のように関西大学の常設展示があり、物理的環境は既に整っていた。また展示に際しては専門的な知識や技術面での協力が得られたことも大きな助けであった。キヤンパス内の地の利もあり、授業の一環として、或いは個人的関心から学生や一般市民が訪れた。期間は、二〇一一年二月五日(月)から、八日(木)までという短いものであったが、三三八名が見学している。

訪れた学生の声を聴くと「ベルリンの壁」という言葉は知っていても、第二次世界大戦で全面降伏し、戦後、連合軍に占領されたのは日本とドイツの二か国のみ、といういわば受験用の知識が、本写真展で具体化され、今日のドイツの繁栄や欧州の統合が、どのような「現代の



展示解説をメモする学生



展示パネルを見る学生

過去」を基礎として築かれてきたのかを、改めて考える契機になっているようだ。第二外国語としてドイツ語を受講する学生のなかには、子ども時代を旧東独で過ごした先生に習う学生もいて、見学後、現在の東アジアの情勢を含めて話題が広がったという。

ところで日独修好の記念の年に、「敗戦」、その結果としての「祖国の分割」を象徴する「ベルリンの壁」展をドイツ側が企画提案することに、疑問を抱く方がいるかもしれない。他方、このような「分断国家」は、冷戦が終わったとされる現代でも、決して「特定の国の過ぎ去った一事件」ではない。特に東アジアでは。そして日本もそのような事態とは様々な意味で、歴史的に無関係であるとはいえない。換言すれば「ベルリンの壁」は、単にドイツという一国のみに生じた特殊な事件ではなく、いつでも、どこでも繰り返され得る「歴史」なのである。そのような悲惨な歴史を繰り返さないために、今日、国境を越え記憶を共有する運動が世界的に広がっている。「ベルリンの壁」展はドイツの現代史を紹介するともに、そのような「記憶の共有」の一つの動きでもある。

従って、次に展示の内容を若干紹介しておきたい。

二 ドイツを越えて「世界の記憶」へ

歴史的「事実」の認知や解釈には、必ず観察者の視点が入る。特にナチ体制崩壊後の冷戦下における政治対立を複雑に反映する「ベルリンの壁」展には、そのようなポジショナリテイの問題があることを初めに指摘しておきたい。その上で、以下、本展示の特徴を、歴史的流れとともに紹介したい。

先ず「ベルリンの壁」展で展示された資料は既述のように、「社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金」と大手日刊紙であるBILD（ビルト）紙およびDie Welt（デイ・ヴェルト）紙が中心になり、両新聞社の保管資料から選択された写真や文書、二〇点である。その中には、数十年間も資料庫に眠っていて、今回、ようやく再び人目に触れた、というものもある。ヴェルト紙のスヴェン・フェリックス・ケラーホフ（Sven Felix Kellerhoff）と、ビルト紙のラルフ・ゲオルグ・ロイト（Dr. Ralf Georg Reuth）とどう二人の文筆家が、一九五

二年以来ドイツの国土を分断した隔壁や、壁建設の背景である歴史的ドラマを、そして西側大国の反応を描き出している。」(本写真展のためのパンフレットより)

展示内容は大きく三期に分かれる。先ず第一期は、ヤルタ会談での米国、英国、ソ連によるドイツ東部国境の西側への移動、連合四カ国による国土の分割占領(各占領地域は、「ゾーン」と称された)、及びソ連占領地域に入ったベルリン自体の分割占領(各占領地区は「セクター」と称された)の決定、一九四八年、西側の通貨改革断行後、ほぼ一年続いた「ベルリン封鎖」、分割が既成事実となり一九四九年秋、両陣営に分かれる形で建国された「ドイツ連邦共和国」(旧西ドイツ)と「ドイツ民主共和国」(旧東ドイツ)、その後、経済発展が著しい西側へ東ベルリンを経由して脱出する人々の流れ、労働力流出を防ぎ東独の再建を進めるための一九六一年の壁の建設と「黙認する」西側連合国の対応までである。

「ベルリンの壁が建設されるといふ噂があるが、そんなことは起らない」という、当時のウルブリヒト東独第一書記の演説から間もなく、八月一日、日曜日の朝、突

然、東ベルリンで壁建設の工事が始まり、境界線沿いの住居の窓はコンクリートで塗られ、住民は強制的に引越しを命じられる。西側セクターとの交通は、数か所の検問所を除き遮断された。一九六三年、西ベルリンを訪れたJ・F・ケネディ大統領は壁際で「私もベルリン人である」という有名な演説を行うが、同時に、それまでは主要政党が掲げていたドイツ再統一が、決定的に遠のいたという認識がドイツ側に明らかにされている。

第二期は、壁建設後の「相対的安定期」である。人々の絶望感、「射殺命令」まで出され、次第に物理的にも堅固さを増す国境壁やその警備、それにも拘らず脱出を試み命を落とす人々、脱出に失敗した人々が「共和国逃亡」「祖国への背信行為」等の罪で収監される非人間的な監獄、一方で始まる西独側の経済支援と、選ばれた収監者の西側追放(「人身売買」と称されることもあった)などがテーマである。この間東独により、境界線警備のために地雷とともに、六〇年代から八〇年代前半にかけて国境壁に設置された種々の武器がある。例えば「SM-70自爆器」は三〇〇kmにわたり八六三、〇〇〇個に上ったと

いう。それらは八〇年代半ばからの東西交流の深化・拡大、経済援助の増額等の過程で取り外されていくが、最終的な除去は一九九五年であったとされる。

このような軍事的境界線の壁を越え西側への脱出を試みた様々な事例は、映画にもなり国際的に知られている。しかし失敗例の方が多く、一九六一年の壁建設から一九八九年十一月の壁崩壊に至るまで、ベルリンの壁近辺で二五〇名、ベルリン以外の東西ドイツ境界線で二八四名、バルト海経由で一六四名、その他のルートや警備兵自身の逃亡の失敗などを合計すると八〇九名、壁建設以前の死者（逃亡に成功した後、連戻され処刑されるなど）を含めると一三九三名が命を落としているという。この間、東独はワルシャワ条約機構の一員としての存在感を増し、日本を初め多くの国と外交関係を結び、国際的地位を築いてきた。

第三期は、ベルリンの壁崩壊とドイツ統一である。国際的な地位向上にも拘らず東独は、ソビエト連邦はじめ多くの東欧諸国と同様、独裁的政治状況下で経済は悪化し、一九八九年、ポーランドやハンガリーの民主化後、

再び人々の「共和国逃亡」が、今度は（在東欧諸国の西独）「大使館亡命」の形で始まった。一〇月の「建国四〇周年記念式典」は一般市民のデモのなか、外国メディアを締め出して挙行されるが、ゴルバチョフの「歴史の流れに疎い人々、そのような人々に危険が迫る」という演説もあり、政治局は改革に乗り出す。その際、一月九日夕方の記者会見で他の改革項目とともに、「旅行の自由」を政治局員のシヤボフスキーが読み上げたのが、実質的な「壁の崩壊」をもたらしたとされている。「それはいつからか？」という特派員の質問に「特に何も書かれていないので、即刻だと思う」という趣旨の答えが彼の口から出ている（彼は当日議論の際、別件で会議の場になかったとされる）。その夜「壁の自由通行」のニュースは東独の東側国境にまで広がり、多くの市民がベルリンの検問所へ押し寄せ、西ベルリンは例外的に開店時間を延長し、一晩中公共交通機関を走らせ、その様子は世界中に報道された。その後周知のようにドイツは、「欧州統合のなかのドイツの統一」という主張で、当初は警戒感を見せた近隣諸国や連合国などからの承認を得て、一

一九〇年一〇月三日再統一され、現在は東独出身の女性物理学者、アンゲラ・メルケルが首相を務めている。

ベルリンの壁は崩壊したが、新たな問題も浮かび上がっている。それは本展示の最終部分で示されている「ベルリンの壁裁判」とともに進む壁の司法的検証である。この問題は、例えば「射殺命令」など特定の国や時代に「法的正当性」を持つ非人道的行動をどのように判断するか、という、戦後のドイツや日本、そして現在でも、無関係ではない問いとも関わる。東独の社会制度が残した「非人道的問題」として、最近でも例えば、親が「反社会的問題行動」等で有罪となり、イデオロギー的観点から強制的に里子に出され、トラウマを負いながら育った子どもたちの問題がメディアで取りあげられている。

今回の「ベルリンの壁」展示資料は、冒頭で述べたように統一後の「社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金」と西側の大手メディアの資料に基づいている。本展示では明らかにされていないが、戦後、ナチ政権を支えていた経済界や政界の勢力が残存したり一部復活するのを見て、社会主義の未来を信じ西側から

東側へ「亡命」したドイツ人も少なくない。彼らから見ると、ベルリンの壁崩壊とドイツ再統一はどのように見えるのだろうか？

同連邦基金は一九九八年、連邦政府の「文化とメディア」総監のもとに設立され、現在も「直近の過去」との取り組みを進めている。二年後、連邦政府は「記憶・責任・未来」基金を、経済界の拠出金と折半する形で設立している。こちらは連邦法に基づく公法財団で、東欧の民主化後、新たに明らかになったナチ時代の強制労働の被害者補償にあたり、現在は青少年の啓発活動等を、国境を越えヨーロッパ次元で展開している。

「壁——ドイツをつらぬく国境」展は、最後に「記憶の問題」について触れている。記憶の問題は、単に「過去の実事を忘れない」だけではなく、未来へ向け「現実」とどのように取り組むかという課題と深く関わる。冷戦下の東西対立から緊張緩和、そして和解への道を可能にしたドイツの政治家として、ヴィリー・ブランド（一九一三—一九九二）がいる。彼は、戦時中、反体制運動の

ため、一九歳で北欧へ亡命しナチ政府に追われる身であったが、戦後帰国し政治家になった。一九七〇年、ドイツ首相として初めてポーランドを訪れた時、ワルシャワの「ゲットー蜂起記念碑」での献花式典の際、膝をつき謝罪の意を表明した。その行為は東西両ヨーロッパで大きな印象を与え、彼の東外交はやがて「欧州共通の家」を謳う「ヘルシンキ会議」へ通じ、その協定の文言がその後、東欧の独裁体制を内側から批判し民主化へと通じた市民運動家や人権活動家たちの拠所ともなった。

そのブランドは、一九六一年朝、予告なしに、東独兵士が鉄条網で境界線を閉鎖するという緊急事態に、西ベルリン市長として一人で対応を迫られている。当時、ボンに在るアデナウアー首相が西ベルリンへやってきたのは、数日後であったという。「ベルリンの壁」展では、第七「現実政治」のパネルにブランド、ケネディ、アデナウアーの三人のパレードの写真があった。「現実政治」が時間とともにどのように展開していくのか、「ベルリンの壁——ドイツをつらぬく国境」展は、「ドイツの国境」を越え、改めて多くの世界の「現実」と未来について語っ

ているようである。

このような歴史的事件に関する写真展が、関西大学の「年史編纂展示室」のご協力を得て開催されたことにたいして、感謝申し上げます。



*一九六三年六月、ケネディ大統領（左）を迎えての西ベルリンでのパレードの様子。ブランド市長（中央）、アデナウアー首相（右）。何れも当時の役職名）『Informationen zur politischen Bildung』（一九九八年）は、ドイツ内務省にある「市民性育成センター」の社会教育のための情報誌。本号の特集テーマは「一九六一年から一九七四年のドイツ——変化する時代」である。なお本稿執筆に際しては、他にも一九八九年当時ドイツ留学中の筆者が収集した語資料を参照している。

（すぎたに まさこ 関西大学外国語学部教授）